

旅と地域の研究会（たび研）

中山昭則

Akinori NAKAYAMA

1. たび研の現況

旅と地域の研究会（たび研）は、2010年に創設した「観光と旅の研究会」の活動領域を観光分野からさらに地域研究に広げるために、2013年に「旅と地域の研究会」と改称した。たび研の創設の由来は同誌第2号で既に述べているので参照してほしい。

たび研は2015年1月現在16名の学生が所属している。学年の内訳は4年生が4名（2014年6月で活動からは退いている）、3年生2名、2年生1名、1年生9名で、1年生が多くを占めている。前号で述べた会員不足は数の上では解消した形となっているが、新年度の入会者数が今後の行先を左右するものと考えている。男女の内訳は男子会員5名、女子会員11名と女性の数が圧倒している。

たび研の活動は、この数年は顧問中山が受けている受託研究の補助とその内容に関連した研究を行っている。学生たちが主体的に取り組むオリジナルな研究は実践できないでいる。これは2014年5月まで室員は僅か6名という状況にあり、受託研究の補助で手一杯であったからである。1年生が昨年6月以降大勢入ってくれたことと、受託研究も山場を越えたので2015年度からはオリジナル研究を復活させたいと考えている。

2014年度は本誌研究動向でも紹介した豊後高田市と日田市からの受託研究の補助をすることによって研究・調査のスキルアップを図っている。豊後高田市の調査では昨年8月以降3回現地に入り、聞き取り調査及び観察（踏査）調査を実践している。活動の中心は人数的に多い1年生に拠る処が大きい。1年生の中には既に4回もの現地調査を経験している学生がいる。次いで3回の経験者が2人と続く。この学生たちは既に聞き取り調査も実践し、かなりのスキルを得ている。他の室員も今後彼女らの経験値に近づいていくものと期待したい。

2. 対外的にも頼られる存在に

たび研は2000年に創設した「別府大学地理学研究室」を母体としている。これまでの研究活動の積み重ね（OB各位の努力と熱意）の結果最近では外部的にも頼られる存在となってきた。2014年度は6月28日（土）に開催された『平成26年度油屋熊八大学校開講記念式典』の場で発表の機会が与えられた。また、大分県産業創造機構が発行する機関誌『創造おおいた』2014年11月号（No163）に紹介された。

今日に至る実績を積んでくれたOB各位には感謝する次第である。本誌で紹介している顧問中山が請け負っている2件の受託研究も、学生が積極的にそして高い水準の活動をしているということで白羽の矢が立ったといえる。

3. 実践経験を積んできた4年生

4人の4年生は様々な活動を実践してきた。ここで彼らの実績を挙げてみよう。まず1年生の時点で日出町の観光資源調査に加わった学生がいる。また受託研究動向でも取り上げた



写真1 活動風景（2014.10.8 阿部博光教授撮影
（当時は1～3年生で9名だった）



写真2 山鹿温泉聞き取り調査 (2014. 3. 16)



写真3 新別府観察調査 (2013. 10. 19)



写真4 全員揃っての懇親会 (2014. 8. 7 当時は12名)
ちなみに、1、2年生の飲酒は固く禁じ、教員
や先輩につぐこともグラスに触れることも禁じ
た。



写真5 長崎島の調査にて (2014. 11. 8)

通り日田市の受託研究調査旅行に2年連続で参加した者もいる。さらに、鉄輪温泉において旅館の女将を対象とした聞き取り調査、新別府および鉄輪温泉の観察調査等も経験している。そして2年次の春に実施した長崎のボランティアガイドの実態調査もしくは、3年次春の山鹿温泉・杖立温泉・黒川温泉の現地調査を全員が実践している。こうした経験が卒業論文作成に大いに役立ったであろうと自負している。

4. 期待が高まる今後の活動

今年度9人もの1年生が入ってきてくれたので、今後の活動に期待が高まる。彼ら全員従順な性格なので、上級生の指示に従って順調に活動をしている。このまま成長すれば、次年度からは主力としてさらに高いレベルの活動をさせたい。特に経験値の高い4名の女子学生に当面活動を引っ張ってもらいたい。後発で入ってき

た1年生も一日も早く彼女らに追いついてもらわないといけないが、そう遠い日ではないだろう。

3年生は2015年2月の研究発表会では卒論構想を発表する。個人研究のスキルを上げることで会をリードしてもらいたい。たった1名の2年生は地道な努力を惜しまない学生なので、1年生の良き模範となっている。この粘り強さは研究には欠かせない。

このように前年までの状況はまるで嘘のような賑やかさである。この賑やかさを一過性のものにならないようにしなければならない。そして研究の水準の維持と今以上のレベルに引き上げていかなければならない。このためには新入生の加入が絶対条件といえよう。